

田村淳平(タムラ ジュンペイ)  
平成19年度4次隊 自動車整備 南アフリカ共和国

## プロフィール

1979年草津市生まれ、整備学校を卒業後、大津市のフォルクスワーゲン滋賀に入社。そこで4年半在籍。その後兵庫県の整備工場に3年勤務の後、協力隊に応募し、20年3月南アフリカ共和国に派遣。

## 南アフリカ共和国の紹介

私の赴任している南アフリカ共和国は15年ほど前まで、アパルトヘイト体制化に置かれていました。その政策は廃止になったにもかかわらず、その面影は今なお、色濃く残っています。赴任地はムブマランガ州といって、モザンビークとスワジランドの国境に程近い場所に位置します。そこは四国と同じくらいの面積のクルーガー国立公園に面しており、アフリカの大自然を肌で感じながら活動を行っています。

## 活動や生活について

私の活動はもともと黒人居住地であったタウンシップ内の職業訓練校がメインになっています。アパルトヘイト状況下において、十分な教育を受けることが出来なかった教員や生徒に自動車整備の技術を、授業を通して教えるというものです。現地人の同僚と共に毎日午前7時半から6時間の授業を行っています。その授業以外にも授業の一環として、近所の人の家に生徒と共に訪れて行う出張修理も行っています。現在、赴任から約1年が経ちました。赴任当初は、なかなか同僚や生徒から受け入れてもらうことが出来ませんでした。授業に出ても座って授業を眺めているだけで、仕事を頼まれてもテストのコピーをとることや、書類の作成、書類の整理などを行うだけで、実際に要請にあるような自動車整備の技術指導のようなことはまったくできず、もどかしい気持ちで日々、授業に出ていました。「自分はこんなことをしに南アフリカに来たわけじゃない」と考えることもしばしばでした。そんな気持ちで過ごしていたある日、同僚が近所の人から依頼された車の修理をしているところを横で見えていました。その時に同僚が私の想像のつかない方法で修理をしていたのです。それは寄せ集めの部品で作った工具を使用していたものでした。それは非常に合理的なものでした。日本で特殊工具や専用工具に頼って整備をしていた私にとって大きな衝撃を与えました。そして日本でやってきたことや協力隊としての活動よりも、同僚から整備の技術を学びたいという気持ちになりました。それからは同僚が修理をする場所には必ずついて行き、一緒に作業をしながら整備の技術を教わるようになりました。そうしたことを続けるうちに、じょじょに授業を与えてもらうようになり、生徒からも認めてもらえるようになりました。そして同僚から「お前が分からないことは教える。お前も私の分からないことでお前の知っていることは教えてくれ。二人で知識を共有しよう。そしてそれを授業に反映させよう。」とってもらえるようになりました。それは赴任当初の日々を忘れるくらいうれしいものでした。そして今では授業前に二人で相談し、アイデアを出しながら授業を進められています。赴任当初を振り返り、自分には最初日本で働いていたことから来る奢りがあったことを感じます。今後南アフリカでの活動の上でも、その後の日本での生活においても奢りを捨て、謙虚に取り組んでいきたいと思います。そのことが協力隊として南アフリカで得た一番大きなものでした。



自動車整備科の同僚と共に



実習授業



自動車科の生徒と共に



実習授業